

# 冬の朝

中谷ひろし

冬の朝喉がからから二日酔

暴言も時に笑いで吹き飛ばす

欲望のひとつ夢見る宝くじ

こぶ頭秘密はもたぬことにする

「津軽弁 嘉瀬小話」

## 阿部按摩師笑い話

### 「お神酒」

目を悪くして、町の眼科に通院している。トンボのオドは、大の酒好きである。

オド「先生イ、酒コ飲んで、イベガ」

先生「お神酒コぐらいだば、ヨガベネ」

オドは、帰宅するや、神棚に一升供えた。

嬢ア「オドア、お神酒一升も上げで、ドスダバ」

オド「医者さまさ、キダキヤア、お神酒コダバ、飲んで、イダド」

嬢ア「ワイハー、ナンボお神酒でも、一升も飲めば、マナグサ、アダルベネナ」

オド「ナーモヤ、酒コ、マナグガラ飲んでネエーシ、  
口ガラ飲ムモンダネ」

(森村)

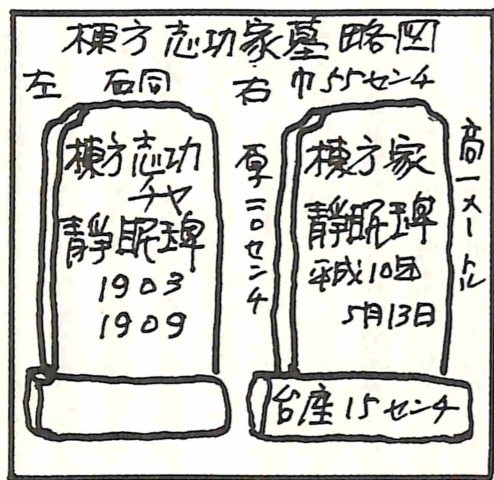


## 志功と鹿内仙人と 漫遊こと小山内仙人

### 棟方志功

平成十三年九月 日曜日、嘉瀬奴橋を九時三十分、軽トラックで出発、青森市宮三内霊園着十時四十分であった。

霊園参道は至るところ桜並木のトンネルである。今年は青森に台風の上陸がなかったせい、桜葉に蔽うわれた参道は、薄暗い。秋彼岸もすぎ、霊園一帯は清掃されて、墓は日和を浴びていた。



世界の棟方志功の墓を尋ね、園内を二度廻ったが見当らなかつた。捜し疲れて東屋で一休みして参道に出ると、思いがけなく、矢印に棟方志功の墓はこちらですと、小さい表示板があった。

### 山中 長三郎

画家として功績のあった志功の墓とは思えぬ、小さ目の墓でした。

志功は昭和五十年七十二歳で生涯をとじたが、一区画を購め、夫婦の墓にすべく碑名を書き置いていたと言われる。高さ一メートル、巾一メートル五十センチ、厚さ二十センチ、台座は十五センチで、周囲墓地より優っているとは見えないが、墓素材は他に見られぬ貝が入ったような光る石材で、二基並んでいる。



碑名(静眠碑)の碑の字について、作家の司馬遼太郎氏の説によると、静眠は造語であり、碑にいたっては辞書にもない造り字であり、石偏を私的に玉偏にしたようだという。

志功は非常に造語癖のある方で、版画という共通の日本語を外して、自己流に板画と称し、その板画にしばしば、造語が書かれてあると言われるが、それが不思議にも作品にプラスになっっているそう。

司馬遼太郎氏の著(街道)によると、志功は不思議なほど立派な人々に恵まれた方であったと言う。

初期に会津八一（一八八一年～一九五六年）英文学者であり、歌人であり、書家でもある会津八一氏から、中国の古代文学、金石本の拓本を見せられ、書はこうあるべきと教えられ、志功の板画のなかの字も、やがて石工が鑿で叩き彫った金文や石文のようになっていったと言う。

志功にとって最大の先生は柳宗悦（一八八九年～一九六一年）であるとしている。

柳は日本の美学理論の創始者として、十六世紀の千利体以来の人といわれ、志賀直也・武者小路実篤らとともに「白樺」の同人で、美術面を担当していた。

昭和十一年のこの時期、志功は箱根から西に行ったことがないと言われたが、たまたま陶芸家の河井次郎が京都に住んでいたことから、柳にすすめられて、志功は京都に登って、清水寺に近い河井邸で食客のような生活に入り、毎朝河井の「碧山巖録」の講義をうける日々を送った。河井は志功に「板画を作るようではだめだ」「板画は生れてくるようにならなければ」と言われたとされ、この創作思想は志功にとって終生のものとなったとされる。

東京代々木に住む水谷良一氏は、柳宗悦の同調者であり、商工省のキャリア官僚で、超俗的な教養人で、蔵書家でもあって、とくに仏教学に秀で、志功に仏教的な詞藻を指導しつづけたのは、この人であった。

志功の最大の大作である「華嚴譜」の作品は、仏教的思想に裏付けされ、水谷氏でさえ想像されない、志功の天才的才能が展開され、開花された作品だと評された。

志功の作品は亀ヶ岡縄文の息吹であり、津軽の祭りの躍動であり、又佛教の教義を求めて昭和四十七年に詩人草野心平とともに、インドを旅したと言う。

我ダバ、ゴッホになる。と志を立てて、大正十三年二十一才の時、兄弟・友人に見送られた青年志功の姿が、青森駅頭にあった。紺緋に袴をつけ、町鍛冶工に作らせた自分流の徽章をつけ、学生帽をかぶって上京したといわれる。

一、九三八年「善知鳥」で帝展・版画部門で初めて特選、一、九五二年スイス・ルガノ国際版画展で「女人観音」が優秀賞。一、九五五年サンパウロ・ビエンナーレで「釈迦十大弟子」最高賞。一、九五六年ベニス・ビエンナーレで国際版画大賞と数々の賞を受賞、板画の鬼と称される棟方志功は青森市がふるさとである。

中国の古代金石文の流れをくむ志功の独創的な文学「静眠碑」の墓石の下に棟方志功は永眠している。

「北に生れたということ、ぼくは誇りに思っている。いまの日本文化に、北の逞しい息吹をふきかけてやりたい。そうい



山内墓地 棟方志功墓標



案内板

う意味で、ぼくは北に憧れ、北を愛するんだよ」と奇人と称された棟方志功の言葉である。

## 鹿内仙人・小山内仙人

八甲田山の奇人は軍服姿に胸いっぱい勲章を付け、旧陸軍のラッパを、八甲田の山々を隈無く吹き歩き、八甲田の山々の案内に終止した鹿内辰五郎仙人を、世間では奇人の一人にあげていた。

それに旧嘉瀬村の出身小山内嘉七郎（通称漫遊）と、棟方志功を加えて津軽の三奇人とされていた。三人とも肝胆相照す仲で、よく酸ヶ湯に集まり、夜の更けるまで語り続けていたと言

う。昭和四十年十一月二十五日、作家三島由紀夫氏（「金閣寺・憂国」等の作家）が自ら主宰する楯の会という組織の腹心三人を連れ、東京市ヶ谷の自衛隊に乗り込み、東京方面軍総監部の中枢を占拠し、総監の益田兼利をしぼりあげ、要求書をつきつけ、広場に自衛隊員を集めさせ、「共に決起せよ」と訴えた。

三島由紀夫は「諸君は武士だろう、武士ならば自らを不定する憲法をどうして守るんだ」「どうして自らを不定する憲法にペコペコするんだ」と叫んだが、演説の内容は隊員たちの怒声と野次によってかき消されていたそうである。

訴えが受け入れないと知るや、三島由紀夫は、総監室で腹心一人に介錯させ、割腹自殺、命を絶った。

三島由紀夫の告別式に参列した小山内漫遊氏は、髪は胸までたれ、頭に頭巾をのせ、首に数珠をかけ、法螺貝持って、山伏姿の漫遊は、たちまち記者にかこまれて中央新聞、週刊紙に写真入りで、奇人の参列者としてニュースになった。

昭和の初期、志功がまだ三十才の頃、鹿内仙人と八甲田山に遊んだとき、八甲田の山に舞う鷹を見た。その時鹿内仙人は、「棟方サン、アナタはエライ画家ニナルヨ」と言ったと言う。

八甲田山麓のホテルのロビーの壁に志功の鷹の絵がかかっている。賛に「神鷹」とあつて、祭舞いの図という。鹿内仙人に「あんたはえらい画家になるよ」の言葉どおり、棟方志功神鷹になつて八甲田に舞い続けていることだろう。

昭和三奇人の一人小山内漫遊氏も、棟方志功の画かれた嘉瀬の桃こと、黒川桃太郎の下絵を原画として作られた木像、桃地蔵を嘉瀬観音堂に安置、人里はなれた観音堂に居住、日夜桃地蔵を供養し続け、昭和五十三年三月二十日午後一時、観音堂内桃地蔵前で、誰に看取られることなく、八十三才でこの世を去つた。

## 遺稿

### 嘉瀬の歳時記

嘉瀬の年中行事も、その時、その時代の社会構造の変遷に伴つて、生活環境の変化から、藩政時代から培われてきた伝統工芸・民間行事・農作業・食生活も様変わりしてきた昨今、村の古老から聞き語りで集めた、津軽地方一般の古き過去となりつつある習慣行事を書き留めた。(秋元惣之進)

#### 行事・農作業

##### ◎「旧正月」

第二次世界大戦(大東亜戦争)が終戦して、昭和二十五年頃までは、嘉瀬地区の農家の正月は旧暦であつた。

旧正月元旦を大正月と呼んで、大抵の家では七日まで休んだ。七日の事を七日正月、旧正月十五日を小正月と言つた。

また大正月を男の正月、小正月を女の正月ともいつた。三十日は三ン年で、正月の終りである。

藩制時代の農家の休日は年間三十日とあつたと言う。正月休みが最も長く、この時期は農閑期となるも、農家は朝早くから晩遅くまで、俵編みや「ノマ」編み、縄なりと、寸分の暇もなく働いた。

男は鶏鳴と共に起き厩を片付け、女は竈に火を焚き、ミンザ(流し場)を片付け、親爺は井戸の釣瓶繩を取り替えたりする

### 「津軽弁笑い話こ」



#### マシゲ(すりこぎ)

十五になったハツヨが、二十になる隣村の与作のところ  
に嫁にいった。

その夜、ハツヨに付添いの叔母が、「何でも婿の言うとうりにして、幸せになれ」と言つて、二人の寝所から階下  
におりた。

次の朝、「イガッタナア」と叔母はハツヨに声をかけると、  
「キッ」と叔母をニラミ「ナニ、イイモンダバ、痛くて、  
痛くて、マカダガラ、血コ流れで、今も、マシゲ入ッテル  
ンタネ」

叔母「マシゲも、使いナレレバ、ダンダン、イグナルネ」

(チヨ)

#### 秋元惣之進

家もあつた。旧正月の一日には新婚の嫁婿は、嫁の実家に行く  
が、嫁の実家で大喜びで親類の人達を呼んでお祝をする。

##### ◎「餅搗き」

農家では年の暮に餅を搗くが、多いところでは一俵から二俵  
も搗く。お供え餅から、切り餅、干餅を搗く家もある。

##### ◎「ニラ」(作業場)

明治から大正初期にかけての貧農は、大抵の家では掛け筵や  
敷筵で、村の旦那衆(財産家)以外は、貧弱な家だったから入  
口には掛け筵を敷いていた。

農家の入口は土間で、突き当りが「ニラ」(作業場)になつ  
て、冬は外仕事が出来ないので「ニラ」で仕事をした。「ニラ」  
は粘土の土で固めて、ここで筵や俵、また「ノマ」を編んだり、  
脱穀や米搗きをした。

##### ◎「小寒・大寒」

津軽では旧正がすぎると、寒さがゆるんで「寒三、寒九」と

言つて、寒に入つて九日目に降る雨を「寒九の雨」と言つた。この日に雨が降ると、今年は水が豊富で、稲作に水の心配が無いと百姓は喜んだ。また寒中の雨は雨返しが無いとも言ふ。寒が明けると立春だが、これは暦の上の事だけで、津軽では立春が過ぎてからも寒波が時々くる。冬の支度に蓄えていた薪を焚いてしまい、時々寒波がくるので棚板をこわして、燃やした家もあったと云う。

### ◎「ガンの目隠し」

津軽では「ガンの目隠し」と言う言葉がある。津軽から「雁」が去る時分に、横なぐりの吹雪きに雁が目隠しされ、方向を見失うのである。これが過ぎると、いよいよ津軽の野づらにも春がくる。

### ◎「二十三夜祭」

一月二十三日夜祭で、婆様達が講中をつくつて、旧暦の一月・五月・十月の各二十三日を例祭日とし、婆様達が仲間の家に集まり、山から登るお月様を拜むが、お月様の登り具合を見て、今年の豊凶を占う。

豊作の年は、お月様が船に乗つて「ヘラ」を持つて来るが、不作の年は「シャグシ」を持つて登り来ると言う。

### ◎「厄払い」

厄年に當つた男女が除厄祝いをする。男は二十五才・四十二才・女は十九才・三十三才が大厄で、厄がかつていられる。私が小学生の頃に、嘉瀬鍛冶町の吉崎忠直さんの母と、平井

清さんの母親が厄祝いをしたのを見た事がある。婆様達が花嫁・花婿の衣装をつけ、白粉を塗り、そのあとに酒樽を担いだ若衆姿の女達が並び、嫁入り行列をつくつて歩き、飲めや唄えの大騒ぎであつた。

### ◎「種蒔」

農家は彼岸の中日前後に種浸し、種蒔の準備をする。種蒔は種池かタメ池に浸ける。また大抵は子（鼠）の日を選んで種浸けをするが、子（鼠）のように沢山育つようにとの縁起からと思ふ。

農家は雪が消えると急に忙しくなる。苗代に種を蒔き、田打時には梅・桃・田打桜と次々と咲き、野良で働く人も活気にあふれ、野づら一面に陽炎が立ち登る。

昔は三本鋏を使って田打ちをしたが、大正の頃から馬耕が入り、農家の三分の一は馬耕になつた。

### ◎「干餅ごろ」

田打の頃には軒下に下げておいた干餅をおろして食べる。寒中に搗いた干餅はよくかわいて歯ざわりがよく、農繁期の間食に最適であつた。

この頃には「ニシン」も獲れて農家の食膳を賑わしたが、身欠ニシンもまた、農繁期の食べ物として欠かせなかつた。

### ◎「田植」

田植えは農家にとって秋の稲刈と共に、もっとも忙しい仕事のひとつで、田打、畦畔塗り、代掻きと重労働が続いて、田植

の準備ができる。

昔は八十八夜前後に初蒔きをして、三十三日〜四十日で田植えをした。また入梅の露に当つて植えると言われた。

腰切田が多く、仕事が捗らず、苗付馬と稲付馬がいっしょになつたと。

田植には親類、隣り近所五〜六軒で（寄合い）をつくり、赤飯を炊き、神佛棚にお神酒と身欠鯨を供え、田の「ミナクツ」（水の取入口）に酒を供える。

一休みをする度に酒を飲んで元気づけ、一日五回も飯を食べた。梅雨時の寒さで、田の中の仕事は身体にこたえる。田植が終つてから、田植人へ田植勘定をした。

### ◎「早苗振り」

田植後に田の神を迎える祭で、田植えが無事に終つた事を祝う。嘉瀬では昔、派立の橋を境に、東と西に分かれ、虫送りが行なわれた。太鼓や鉦・笛と威勢の良い囃子で騒ぎまわつた。

大名行列、荒馬、獅踊りと続き賑わい、早苗振りは間は、藁でつくつた蛇体を造つた。村を担ぎまわり、その後には村境の大木に掛けた。

### ◎「田の草取り」

早苗振りが終ると田の草取り、昔は手で稲の回りを、ひと株ひと株と除草をしたので、稲の葉でよく目を突いた。医者に行くお金も無く、放つておく人が多かつたので、失明する人が沢山あつた。

田の草取りも、一番草から三番草が終り、旧暦の五〜六月は、神社やお寺の宵宮で賑わう。宵宮は初夏の暑さに向うのが楽しい。

### ◎「宵宮」

昔の人は神仏の信仰心が厚く、お宮やお寺を中心に集落の生活の規律を保つた。宵宮はお宮に限らず、お寺でも行つたとの説がある。

宵宮は朝から太鼓が鳴り、幟が立ち、出店が並び、人々の気持ちを浮き浮きさせる。参道の入口には絵灯籠が立ち、日が暮れると灯をとます。

### ◎「螢狩り」

宵宮の頃には螢が飛ぶが、昔は田堰、堤、沼、小川などの水辺に沢山いた。初夏の夜に光を放ち飛び交う螢は、美しいばかりで無く、夢幻的な神秘を感じさせる。

沢山とつた螢を籠に入れ、軒下に吊るしたり、蚊帳の中に放した。青白く明滅する光を眺めると、涼しく感じ、寝苦しい夜螢の光を眺めている内に眠りに落ちる。

### ◎「土用」

土用は七月二十日頃から十八日間で、嘉瀬には昔、後町の湯、デンハツ湯、鶴の湯と三軒あつた。

丑湯には村の人々や、村からも大勢の人々が来て、「イモ」を洗う程に賑わい、汚れる程に効めがあると言う。湯にも出掛けない家でも据風呂があると、桃の葉などの薬草を入れて入浴

した。

### ◎「お盆送り」

「お盆が来ても吾が親くない、盆の味噌煮ア吾が親だ」  
お盆は祖先の霊を祈る行事で、十億土から霊が帰ってくる  
と信じられていた。

盆の十三日には墓参りをして、二十日盆まで供養するが、お  
盆の二十日を二十日盆という。

お盆が近くなると、どこの家でも仏壇を掃除するが、また盆  
灯籠を出して支度もする。茄子や胡瓜に割箸の足をさしてつく  
る。牛や馬は、大抵の家では子供達につくって貰う。また大根  
を細かく刻んで「アラレ」や、水・酒は亡き人が好んだ場合に  
供える。また祖先の霊を弔う為に、棚経をあげる家もある。

十三日の法界はどこの家でも家族揃って出掛け、盆休みには  
嫁入り先から娘達が里帰りしたり、遠くから親類縁者が遊びに  
来たりするから、墓参りは賑やかである。

お寺の境内は人々でいっぱいになり、線香の煙でむせかえる。  
盆中に行われる一般の娯楽は盆踊りだ。本来は盆に招かれて  
くる精霊を慰める為の仏教的ないわれが、次第に娯楽化として  
の性格をもつようになった。

### ◎「お山参詣」

お盆やネブタが終ると、いよいよ「お山参詣」だ。岩木山に  
は其の年の収穫を感謝して参詣する行事だが、津軽の年中行事  
として最大のお祭りである。

昔の人々は、お山は神様の住む山であり、心の拠り所として

の信仰的対象であった。農民はお山は豊凶を司るものと考え、  
農作業をお山の神様が教えてくれるものと信じた。残雪の形、  
お山の変化、雲の動き、霜雪の遅速、其の気象の動き、天候の  
変化など予知した。

誰でも朔日山をかけられる様になったのは明治になってか  
らだと云う。本来は山かけの人は三十七日間、精進潔斎をした  
が、一週間に短縮されたと言う。

この間に、村の鎮守様にたて籠り、家には戻らない別居生活、  
魚や肉類は一切れも食べない。川に縄を張り、水垢離を取る、  
これがすむと、近村の氏神様参りや、親類回りをする。この時  
も山かけと同じ白装束を身につけ、御幣を持ち、登山嚢子で掛  
声勇ましく練り歩く。立ち寄られた親類や知巳の家では、精進  
料理で酒を振舞い、壮行を祝う。

津軽に生まれた男は、若い者になってもお山をかけない人  
は、一人前の男とは言われなかったので、意地でも登ったもの  
だと聞いた事がある。お山に登った回数が多い程誇りでもあつ  
た。

初詣での御幣は、青、赤、白。ヒノキを匏って（カンナで削つ  
たテープ状の物）薄紙のテープ状に削ったものを三米〜五米も  
ある御幣を作り、若い者の体力に応じ持参する。御幣の他に五  
色の幟りを奉納した。晦日の晩は百沢に宿をとり、山かけは夜  
中から開始、山頂に達し、御来迎光を遙拝するようにする。

松明を手に「祭儀々々 同行斉儀、お山に初田餐、金剛堂さ

い、一々名告拜、南無帰命頂礼」と唱えながら登る。頂上の奥  
宮につくと、御神酒を供え、餅をあげ、御来光を拝み、朝食を  
とりながら一休みする。

私も若いころ、お山に二回位登山したが、岩木山頂からの  
眺望は絶景そのもので、津軽海峡、日本海、陸奥湾、北海道が  
眼下に眺められ疲れが忘れる。

下山はらくで「よい山かけた、バタラ、バタラ、バタラヨ」  
と下山する。岩木神社でお守りやお面などを買い、踊りながら  
帰途につく。村では一行の帰りを村境で出迎える。

藩制時代は、岩木山は「女人禁制」だったと言う。明治五年  
（西暦一八七二年）女性登山もとかれて、自由になった。

### ◎「十五夜」

旧暦の八月十五日が仲秋の名月、この夜の月見は一年中で一  
番美しい。どこの家でも月の見える所にススキ、栗、枝豆、団  
子、ブドウ等を供え、昇ってくる満月を拝む。十五夜の月にウ  
サギが杵で餅を搗いている形が見えると豊作、また女の子は月  
の光で針糸を通すと、裁縫が上手になるといわれた。

### ◎「泥炭切り」

泥炭は葦や萱など、湿原植物が推積し、長い長い年月が炭化  
作用を起した物だと言う。

泥炭は水分が多いので、掘り出して天日乾燥させる。村の人  
達は水を掻いた用水堰や、沼の底から掘り出し、秋の間に「レ

ンガ」位の大きさに切り取って乾かす。

家のまわりなどに壁の様に積み上げたさまは見事である。ま  
た泥炭を燃やすと、異様な臭気が漂い、家の中は勿論、着物も  
泥炭の臭いが付いてはなれない。

昔は囲炉裏に焚くので煙がもうもうとこもって、眼をあけら  
れない程だった。その為かトラホーム患者が続出した。泥炭で  
御飯を炊き、またイモをアブッテ食べた。

### ◎「小正月」

小正月（十六日）の朝は、八幡宮にお参りし、家の中の神仏  
を拝むが、小正月は女の人が主体である。この日は地獄の釜が  
あくと言う。

何処の家でも釜処（カマド）の前に餅や神酒を供えるが、こ  
の朝は、仏様が戻るのを迎えた。この日は小さな十六の握飯を  
握ってつくり、箸をさして立てたものだが、一緒に「けの汁」  
を必ず供えた。

## 生活・風習

### ＝「着物」＝

津軽藩政時代をとおして明治・大正・昭和も二十五年ごろ  
までは、百姓の着ている着物は、つぎはぎだらけの着物をき  
て、三十才位以上になると、今の八十才以上に見えたという。  
三十才を過ぎた百姓は「つぎはぎだらけ」着物に股引を履き、